

色彩が及ぼす介護者への影響

－学生へのコミュニケーション（その1）－

How Does Color Affect the Childcare Working Environment

－ The relationship between specific colors and student communication －

北村 光子

要旨

日本は、高齢者社会になり社会問題や生活問題を抱え生活している。また、その生活環境として人的環境の介護者、施設職員、家族ひいては学生、教員と、一葉を担う物的環境も注目されている。なかでも、介護者ケアに対する質は議論を重ねられ各施設内でも検討されている。そして、施設からは将来、介護福祉士として勤務する学生に対しても過大な期待もある。しかし、施設職員は業務におわれ、学生も勉学に勤しむ日々であり「ゆとり」ある生活が過ごせていない状況である。その一要因は、ストレス社会からくる人間関係、コミュニケーション能力も関係がないとはいいがたい。

そこで、学生のコミュニケーション能力向上のために2施設の施設職員の物的環境によるケアに対する姿勢を検討した。今回は、施設環境としての色彩に注目し、暖色系でもオレンジ色を基調とした場所では、「雰囲気が良い」「落ち着ける」場所としており、更には暖色系が好みの色である職員は寒色系を好む職員よりもケアに対する姿勢に差異がみられた。このことは、着衣する服装によっても初対面におけるコミュニケーション形成に影響があると考えられる。

キーワード

コミュニケーション、色彩、五感

研究背景と目的

昨今では介護環境のあり方が問われ、高齢者施設においても利用者の身心機能の変化に伴う介護研究は様々に実施されてきた。中村らによる「高齢者施設における色彩環境について」（中村他 2006）山下による「施設ユーザーと看護・介護者による色彩環境」（山下 2008）、や葛西らによる「色彩識調査から見た高齢者と青年の対比」（葛西他 2008）、なども高齢者施設における色彩環境について論じている。しかし、そこで生活している利用者や介護者に対する「色彩」に視点をおき相互のコミュニケーション形成についての研究はない。

人は、多くの色に囲まれた生活を営み色のない生活は考えられないといえる。また、各個人の「思いでの色」や「色からの連想」が密接し生活空間を「快適性」「安全性」「見栄え」などを追求した生活を過ごしている。これは、人の五感（視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚）を通じ個々の価値観と融合している結果でもある。五感の中でも「視覚」はその重要度を占め、人とのコミュニケーション形成の価値基準の約9割を占めており人間の価値判断に影響している。このことは、高齢者の施設環境においても同様な事がいえ、利用者や介護者との人的環境としての関係性が大きく介護福祉

に対する質向上にも関係している。更に、中島によると「他者との関係がうまく築けない若者の増加がある」(中島 1991)と指摘されているように、学生も実習などを通し利用者に対して、ケアの最良性やコミュニケーション形成に対して試行錯誤している現状である。

その様な状況をふまえ、施設環境に対する学生への影響はどのようなものなのか明確にし、今後のコミュニケーション能力向上のきっかけづくりが出来ればと考えた。

よって、本研究は、介護環境における住環境での色彩、服装の配色に対する印象に着目し「色彩」を重視し介護に配慮をしているS市内2施設からのアンケート調査と聞き取り調査をもとに、学生指導に役立てるためにも、今後どのような「色彩」が好印象をあたえ今後のコミュニケーションの一形成に役立てられるのかを目的とする。

この2施設は、既に専門のカラーコーディネーターの指導を仰ぎ、「色彩」を取り入れた施設を建設している。H施設は、H18年1月に開設した介護付有料老人ホームでベッド数は介護個室50床、一般個室50床である。1階は事務所。2階・3居室棟の4階はピンク色。5階は、黄色。6階は、オレンジ色。7階は虹色を基本に統一している(写真 1.2)。S施設は、H8年10月に開設されT町からY町にH19年12月に移転した。ダイルームは、壁はオレンジ色、カーテンは緑色で統一している。また、事務所前(玄関)フロアの壁は、暖色系で統一し、壁画は、昔の遊びの風景やおもちゃ、絵本などが描かれている(写真 3.4)。

両施設とも介護職のユニホームのポロシャツは赤。ズボンは、カーキ色。看護職のポロシャツは薄いオレンジ色。ズボンはベージュ色である。

I. 研究方法

(1) 調査対象と方法

研究方法は、S市内の介護付有料老人ホームH施設と介護老人保健施設S施設の所長と看護師長にインタビュー調査を実施した。その後、インタビュー調査の結果を基に各施設に勤務する介護職と事務職を対象に自記入式質問用紙を使用した留置調査を実施した。

調査項目は次の通りである。1)施設について。2)職員について。3)職員の属性。4)自由記述である。回収した調査用紙は、H施設36名中有効回答数は34名、S施設20名中有効回答数は19名であった。

(2) 調査期間

インタビュー調査、2012年9月15日。

アンケート調査、2012年11月22日～12月2日の期間に実施。

(3) 質問紙構成

使用した質問項目のうち本調査の目的に則した項目を1)～4)とした。

- 1) 施設について(内装、各階の物的環境)。
- 2) 職員について(ユニホームの色、利用者の反応、ケアに対する心構え)。
- 3) 職員の属性(性別、年齢、職種、勤務年数)。
- 4) 自由記述。

尚、H施設は、各階(計3階)。S施設は、ダイルームについての質問事項とした。

(4) 調査内容と数量化

- 1) 施設について(内装、各階の物的環境)。

施設において、「内装の感じ方」,「各階での物的環境」について「とても明るい」5点,「まあまあ明るい」4点,「どちらでもない」3点,「やや暗い」2点,「とても暗い」1点とした5件法で回答を求めた。

また,施設内で雰囲気が良い場所,自分が一番落ちつける場所を自由記述で聞いた。

2) 職員について(ユニホームの色、利用者の反応、ケアに対する心構え)。

職員において、「ユニホームの色をみて利用者の反応」,「ユニホームの色で介護者の心の変化」について「とてもあった」5点,「まあまああった」4点,「どちらでもない」3点,「あまりない」2点,「まったくない」1点とした5件法で回答を求めた。

3) 基本的属性

性別,年齢,職種,勤務年数を聞いた。

4) 自由記述。

質問項目以外の色彩や介護のこと等自由記述とした。

(5) 分析方法

インタビュー調査は,その回答を記載する。

アンケート調査は,質問項目毎に実数を集計し,「ユニホームの色による介利用者の反応」「介護者の好みの色に対するケアの姿勢」に対してクロス集計後,相関係数を用い検証した。

IV. 結果と考察

1. インタビュー調査

(1) 導入の発端

- ①両施設とも,ユニットケアを取り入れたいと考えた。既にY県では導入している施設があり見学に行った。
- ②施設というと「暗い」「陰気」「寂しい」というイメージがあると看護・介護職からの不満がありそれを解消するために導入した。
- ③カラーコーディネーターから「色の意味あい」や視力障害による色の見え方の違いを教授してもらいケアに活かしたいと考えた。
- ④S施設の通所介護フロアは元気がでるような配色にした。オレンジは「太陽」グリーンは「木」をイメージした。高齢者の立場になると「派手」「濃い色」がはっきりとして分かりやすい。
- ⑤生活スペースを考慮し壁画,作品展示した。

(2) 導入後の利用者の変化

- ①施設の壁紙,椅子,テーブル,柱などの配置や彩りも考慮したため施設内が明るくなった(色彩と間取りのコントラスト)。
- ②利用者の動きが以前よりも活発になった。
- ③S施設では,移転前後で転倒骨折した利用者を調査したところ,移転前の施設では年5名であったが,移転後は年1名になった。

(3) 導入後の職員の変化

- ①介護職は、ユニホームの色を上衣は「赤」、下衣（ズボン）は「カーキ」にし、「作業します」というイメージよりも「おしゃれ」に注目し選択した。結果は、「赤」はやる気の出る色ということと自分たちでユニホームを選択できたとあってか仕事に対する意気込みに違いがあった。
- ②利用者からもユニホームの色は良い色。認識しやすいと好評であった。
- ③看護職からは、「白衣にしたい」利用者が安心するのではないかとの意見もあったが、利用者からは不満の声はない。

2. アンケート調査**(1) 施設内装**

表Ⅳ-1より、施設内の内装は「とても明るい」と回答した人がH施設では48.7%、S施設では45.5%、「まあまあ明るい」と回答した人がH施設では48.7%、S施設では、50%と両施設とも「明るい」と95%以上の人が回答している。これは、以前のインタビュー調査からもわかるように設計の時点でカラーコーディネーターからの適切な指導や勤務する職員の希望色彩、快適性、安全性などを十分に検討した結果ということが解る。

	%	
	H施設	S施設
とても明るい	48.7	45.0
まあまあ明るい	48.7	50.0
どちらでもない	2.7	5.0
やや暗い	0.0	0.0
とても暗い	0.0	0.0

(2) 物的環境

表Ⅳ-2より、物的環境は「とても明るい」と回答した人がH施設では48.7%、S施設では45.5%、「まあまあ明るい」と回答した人がH施設では48.7%、S施設では、50%と両施設とも「明るい」と95%以上の人が回答している。これは、インタビュー調査から施設の壁紙、椅子、テーブル、柱などの配置や彩りも考慮したため施設内が明るくなった（色彩と間取りのコントラスト）ということからも考えられる。更に、利用者の動きや導線の関係もあり活発に動作が覚醒されている。そのことは、転倒骨折の年間5名から1名に減少したことからも伺える。

色彩が及ぼす介護者への影響

表IV -2 物的環境 %

	H 施設	S 施設
とても明るい	48.65	45
まあまあ明るい	48.65	50
どちらでもない	2.7	5
やや暗い	0.0	0.0
とても暗い	0.0	0.0

(3) 介護職のケアに対する姿勢

表IV -3 より、ユニホームの色に利用者の反応があると、介護者のケアに対する姿勢の変化は、「あった」25.0%、「なかった」6.3%であり、利用者の反応がないと、介護者のケアに対する姿勢の変化は、「あった」6.3%、「なかった」62.5%であった ($r = -1$)。

表IV -4 より、ユニホームの色に利用者の反応があると、介護者のケアに対する姿勢の変化は、「あった」16.7%、「なかった」33.3%であり、利用者の反応がないと、介護者のケアに対する姿勢の変化は、「あった」16.7%、「なかった」33.3%であった。

表IV -5 より、ユニホームの色に利用者の反応があると、介護者のケアに対する姿勢の変化は、「あった」25.0%、「なかった」15.5%であり、利用者の反応がないと、介護者のケアに対する姿勢の変化は、「あった」15.0%、「なかった」55.0%であった ($r = -1$)。

以上のことより、明らかに利用者がユニホームの色に反応すると介護者はケアに対する気持ちに変化が生じたことが解る。これは、長期的な援助行動の動機づけに関する研究について、妹尾らは、「援助成果を“向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬”」（妹尾・高木 2001）と定義し、ケアは条件次第で利用者の幸福感と結びつき、また、将来のケア、あるいは、ケアの姿勢を促進するなど、援助者自身にも肯定的な効果を及ぼすことを明らかにしている。

更に、高木（1996）は、Kaiser（1985）を参考に被服行動には、①自分自身を確認し、強め、あるいは変えるという「自己の確認・強化・変革」機能、②他者に何かを伝えるという「情報伝達」機能、③他者との行為のやりとりを規定するという「社会的相互作用の促進・抑制」機能の3 側面からの社会・心理的機能があると指摘している。

表IV -3 H 施設 %

介護者の姿勢 利用者への反応	介護者の姿勢	
	あった	なかった
あった	25.0	6.3
なかった	6.3	62.5

($r = -1$)

表IV-4 S施設 %

介護者の姿勢 利用者の反応	介護者の姿勢	
	あった	なかった
あった	16.7	33.3
なかった	16.7	33.3

表IV-5 両施設 %

介護者の姿勢 利用者の反応	介護者の姿勢	
	あった	なかった
あった	25.0	15.0
なかった	5.0	55.0

(r = -1)

(4) 好みの色によるケアの姿勢

表IV-6より、H施設において、好みの色が「暖色系」であれば「介護者の介護の姿勢」の変化が「あった」25.0%、「なかった」10.0%、「寒色系」では、「介護者の姿勢」の変化が「あった」5.0%、「なかった」30.0%。「中間色」では、「あった」0.0%、「なかった」5.0%。「黒・白」の明白な色では、「あった」0.0%、「なかった」25.5%であった。

表IV-7より、S施設において、好みの色が「暖色系」であれば「介護者の介護の姿勢」の変化が「あった」33.2%、「なかった」16.7%、「寒色系」では、「あった」16.7%、「なかった」16.7%。「中間色」では「あった」、「なかった」とも0.0%。「黒・白」の明白な色では、「あった」0.0%、「なかった」16.7%であった。

表IV-8より、両施設において、好みの色が「暖色系」であれば「介護者の介護の姿勢」の変化が「あった」26.9%、「なかった」11.5%、「寒色系」では、「あった」7.7%、「なかった」26.9%。「中間色」では、「あった」0.0%、「なかった」3.8%。「黒・白」の明白な色では、「あった」0.0%、「なかった」23.1%であった。

更に、好みの色が暖色系だと寒色系を好む介護者より、ケアに臨む姿勢が優位を占めることが解った。

また、S施設よりもH施設のほうが暖色系を好んだ介護者のほうがケアに対する姿勢が優位だということも解った (r = -0.3)。

中川(2008)は、社会的スキルが被服による印象管理に及ぼす影響について検討している。その結果、まず、被服による印象管理意識の3因子すなわち、被服が自分の振る舞いや他者に影響を及ぼすことを意識する『被服効果追求』因子、おしゃれな服を着ることを重視する『ファッション志向』因子、他者からの好感度を重視する『他者志向』因子から構成されていることを見だし、その上で、ネットワーク調整スキルが被服による印象管理の『被服効果追求』と『ファッション志向』の下位意識に影響を及ぼすことを明らかにした。このことは、今後親しくする相手かどうかを見極める能力が高い者ほど、対人関係に被服が影響を及ぼすことを意識して、コーディネートに気を使い、おしゃれな服を着用しようとすることを示唆している。

色彩が及ぼす介護者への影響

表IV-6 H施設 %

介護者の姿勢 好みの色	介護者の姿勢	
	あった	なかった
暖色系	25.0	10.0
寒色系	5.0	30.0
中間色	0.0	5.0
白・黒	0.0	25.0

(r = - 0.3)

表IV-7 S施設 %

介護者の姿勢 好みの色	介護者の姿勢	
	あった	なかった
暖色系	33.2	16.7
寒色系	16.7	16.7
中間色	0.0	0.0
白・黒	0.0	16.7

(r = 0.5)

表IV-8 両施設 %

介護者の姿勢 好みの色	介護者の姿勢	
	あった	なかった
暖色系	26.9	11.5
寒色系	7.7	26.9
中間色	0.0	3.8
白・黒	0.0	23.1

(r = - 0.1)

(5) 雰囲気と落ち着ける場所

1) H施設

表IV-9よりH施設内での雰囲気が良い場所は、7階、6階、5階、1階、4階の順であり、その理由として7、6、5階に関しては色彩が第1位を占めている。

また、表IV-10より、施設内での落ち着く場所も全階色彩が第1位を占めている（各階には廊下の端に観葉植物が設置されている）。

このことから、4階は、雰囲気が良いランクでは支持がなく、落ち着く場所としても最下位である。

この階の特徴としてピンク色の配色で統一されている。ピンク色は、「優しさやかわいらしさ」(品川 2008)を表しており、また、明るく元気な気持ちになり、人に優しく振る舞うようになる可能性がある。しかし、感情的になり依存心が生じる。このことから、介護者というよりも自分が癒されたいという感情が優先し、専門職が優位とする「雰囲気」や「落ち着き」を求める勤務場所としては、不適応であると推測される。

5階は、黄色の配色で統一されている。黄色には、「とても明るい、喜びと軽快さのみなぎる色である。春のように内からの新しい生命力も感じられ、何かを訴えたい欲求を秘めた色でもある」(同上 2008)。また、ほがらかで楽観的な気分になり、論理的な思考をする色でもある。よって、好奇心・希望・期待・やる気・気分の高揚・満ちた感情・満たされる期待幸福感・親密さ・暖かさ・明るさを求め依存心重苦しさを嫌い注目を集めたいという心理が働く。以上のことから、5階では色彩が雰囲気がよいと感じた人は70.0%、落ち着く場所としても50.0%となっており、更に落ち着く場所としても各階よりも第1であった。このことは、専門職として勤務する場として適していると考えられる。

6階は、オレンジ色の配色で統一されている。オレンジ色には、「陽気・健康さをつたえる開放的な色」(同上 2008)、(山下 2008)である。更に、オレンジを身につけると、明るい気持ちで人と接したくなり、周囲を楽しませたいと思うようになる。また、森らの研究から、マティスの絵画から赤と緑の脳波比較の実験では、赤は、最初、 β 波の増加(脳の活発化)になるが次第に α 波の増加(脳の鎮静化)となり、緑は α 波の増加から次第に β 波の増加となる。マティスの『赤い部屋』の絵画には赤が画面全体を占めおり左上に窓から緑が見えるように工夫してある。強い赤を視覚でとらえ次に緑を視覚でとらえると β 波が増加し次第に α 波の増加が強くなるが、双方減少せず同一の波長となる。これは人間の習性は強烈なものから次第に癒しの色になるということからの実証である(森 2012)。このことから、雰囲気が良い場所、落ち着きのある場所としても同一第2位となり、利用者、介護者の相乗効果が得られると推測される。

7階では床をベージュ色、ドアを中性色(緑色)で配色し廊下には虹が描かれおり雰囲気が良い場所として第1位である。緑色には、「自然の美しい木々を連想し、くつろぎや疲れを癒す色」(同上 2008)である。また、緑はバランスをとる働きをし、穏やかな心理状態をつくる助けになる。結果として、白(ベージュ)はどのような色にも調和し緑を配色することで癒す効果があるといえる。更に床には虹を描くことにより施設の特徴ある色を特徴づけている。また、リハビリ専門棟(居室無し)であり、日常生活している棟(居室)よりも静寂であることも関係していると考えられる。

表IV-9 H施設での雰囲気が良い場所 %

階	順位			
		1	2	3
1	7階(36.7)	色彩(70.0)	広さ(20.0)	家具(10.0)
2	6階(33.3)	色彩(50.0)	季節感(30.0)	雰囲気(20.0)
3	5階(23.3)	色彩(70.0)	採光(15.0)	
			家具(15.0)	
4	1階(6.7)	季節感(50.0)		
		雰囲気(50.0)		
5	4階(0.0)			

色彩が及ぼす介護者への影響

表IV -10 H施設での落ちつく場所 %

	階	順位		
		1	2	3
1	5階 (31.5)	色彩 (50.0)	慣れ (37.5)	空間 (12.5)
2	6階 (28.1)	色彩 (55.6)	慣れ (33.3)	空間 (11.1)
3	7階 (21.8)	色彩 (83.3)	空間 (16.7)	
4	4階 (18.8)	色彩 (42.9)	空間 (14.2)	
		慣れ (42.9)		

2) S施設

表IV -11 よりS施設内(デイルーム)での雰囲気が良い場所は、フロア、ソファのある窓辺、トイレ、事務所前、カラオケ室の順であり、その理由としてフロア、トイレ、事務所前に関しては色彩が第1位を占めている。

また、表IV -12 より、施設内での落ち着く場所も色彩が第1位を占めている。このことから、フロア内の色彩に関して、オレンジと緑で統一されておりオレンジ色には、「陽気や健康などを伝え開放的な色」ということや緑には、自然の美しい木々を連想し、くつろぎや疲れを癒す色」であるということから、フロア内の色彩に関して相互作用が働いていると推測できる。

更に、色彩に視点をおくと、トイレ内の色彩に関しては、様々な配色と柄が描かれており介護者においては、雰囲気がよいととらえているのであろう。

事務所前の壁画に関しては、写真5.6より、暖色系の色彩をベースに利用者の年代に合わせた“昔の遊び”の風景や“昔のおもちゃ”を展示することにより“懐かしさ”を回想させていることが推測され認知症の利用者には効果的だと考えられる。

表IV -11 S施設での雰囲気が良い場所 %

	階	順位	
		1	2
1	フロア (31.6)	色彩 (75.0)	広さ (12.5)
			採光 (12.5)
2	ソファ (26.3)	景色 (80.0)	雰囲気 (20.0)
3	トイレ (21.1)	色彩 (50.0)	
		雰囲気 (50.0)	
4	事務所前 (15.8)	色彩 (50.0)	
		広さ (50.0)	
5	カラオケ室 (5.3)	広さ (100.0)	

表IV-12 S施設での落ち着く場所 %

	階	順位	
		1	2
1	フロア (57.9)	色彩 (75.0)	広さ (12.5)
2	事務所前 (26.3)	色彩 (80.0)	採光 (20.0)
3	ソファール (10.5)	色彩 (50.0)	
		採光 (50.0)	
4	カラオケ室 (5.3)	色彩 (100.0)	

3. まとめ

本研究では、色彩を調整し、人の五感（視覚）にアプローチをすることにより住環境や職場環境など、様々な環境の色彩計画において、人間がより「快適」に、効率的に安全、安心に活動出来ることを論じてきた。このことは、荒木によると「壁紙を中間色や照明をLED（発光ダイオード照明）に使用し、午前と午後で照明の色の変化によって、企業では会議室、事務所などで『ヒューマンエラー防止』に繋がり、会議等では積極的に意見が述べられる」（荒木 2011）の研究結果からも実証されている。

また、病院等での応用は、入院患者の食事時に照明をオレンジ系の暖色に変化させるだけでも、食事が美味しく感じることも挙げられている。各施設の建設時でも専門のカラーコーディネーターからの助言からも当然の結果だといえるが、そこに勤務している職員に対しての実証はなかった。しかし、この調査結果からもわかるように職員は、勤務場所により“雰囲気の良い場所”や“落ち着ける場所”“ケアに対する姿勢”などにも影響があることが解った。

更に、ユニホームの色が暖色系であるにもかかわらず、介護者の好みの色が暖色系であると介ケアに対する姿勢に対して変化があったこともわかった。これには、暖色系には、身体を興奮する性質があり、高木は、「被服行動には、①自分自身を確認し、強め、あるいは変えるという「自己の確認・強化・変革」機能、②他者に何かを伝えるという「情報伝達」機能、③他者との行為のやりとりを規定するという「社会的相互作用の促進・抑制」機能の3つの社会・心理的機能があると指摘」（高木 1996）していることから理解できる。

2施設を比較してみると職員のケアに対する姿勢も差異があり、就職時や職場での色彩に対する導入の方法でも差異があるのかもしれない。

よって、人（学生）が職員や利用者とのコミュニケーションを図る際の、一要因として暖色系を着衣するとスムーズになることが予測され、実習時のユニホーム（ポロシャツ、ズボン、エプロンなど）も暖色系を選択するほうがよいといえる。しかし、就職時の面接、実習オリエンテーションなどでは視覚言語を考慮しスーツが良いのはいうまでもない。

今後の課題

今回は、基本色彩にのみ視点をおき研究を進めてきた。しかし、対象実数が少なく今後検討の余地がある。また、色彩研究は人間の皮膚、眼球、頭皮、爪の色により着衣する服の色、布地などにも影響があり、色の濃淡は人の感じ方にも差異が生じる。勤務する環境整備も日本文化なども考慮する必要がある。

色彩が及ぼす介護者への影響

今後は、介護者、利用者の立場からと学生のコミュニケーション能力向上を基本に色彩に関する研究をすすめたい。

資料



写-1 H施設 各フロア



写-2 H施設 各トイレ



写-3 H施設 緑の植物



写-4 S施設 事務所前



写-5 S施設事務所前

参考文献

- 荒木行彦 (2011) 「イラスト図解でわかる 五感を磨く」PHP 研究所
- 池田 由利子 (2007) 「医療福祉施設のための環境づくり講座」
- 妹尾香織・高木修 (2001) 「援助者に及ぼす援助行動経験の効果 (1)」日本社会心理学会第42回大会発表論集 346-347
- Kaiser, S. B. (1990) The social psychology of clothing: Symbolic appearance in context. New York:
- 葛西 紀己子他 (2008) 「色彩識別調査から見た高齢者と青年の対比 - 高齢者居住施設におけるわかりやすさに関する基礎的実験 (その7) -」日本建築学会大会学術講演梗概集 681-682
- 小町谷 朝生監修 (2008) 「カラーコーディネートの実際 第2版」中央経済社
- 品川 恵保 (2008) 「色のしくみと配色の基礎」U-CAN
- 高木修監修 (1996) 「被服と化粧の社会心理学『広告の中で服装が伝えるメッセージ』」25
- 高木修 (1998) 「人を助ける心：援助行動の社会心理学 セレクション社会心理学7」サイエンス社
- 高木修 (1998) 「被服行動研究における社会心理学接近法」繊維製品消費科学 39 11-17
- 高木修 (2001) 「21世紀に開かれた被服社会心理学」繊維製品消費科学 42 63-64
- 中川由理 (2008) 「被服行動における社会的スキルと印象管理についての研究：着装を規定するACTとネットワーク調整スキル」関西大学社会学部卒業論文集
- 中川由理, 高木 修 (2008) 「社会的スキルが対人関係場面における被服選択と着装感情に及ぼす影響『ACTとネットワーク調整スキル, 被服による印象管理に着目して一』」日本社会心理学会 49
- 中島 梓 (1991) 「コミュニケーション不全症候群」筑摩書房
- 中村 妙子他 (2006) 「高齢者施設における色彩環境について『色と季節感との関係』」奈良佐保短期大学紀要 14: 36-43
- 森 昭雄 (2012) 「奇跡の美術館エルミタージュ『2枚のダ・ヴィンチに隠された謎 2枚のダ・ヴィンチの絵 聖母に隠された秘密』」日本テレビ 2012. 5. 1放送
- 山下 真知子 (2008) 「高齢者施設による施設ユーザーと看護・介護従事者による色彩環境評価の共通点と際について『高齢者の回復期ケアを目的とした施設空間の色彩設計に関する研究』」大手前短期大学研究集録 27: 93-109